

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Three Ranks論
Author(s)	横山, 悌志
Citation	広大言語 , 5 : 25 - 30
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046222">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046222</a>
Right	
Relation	



語の魔力で説明することはできない。」と述べているが、確かにこの言語の魔力が（Haversも言う如く）タブーをひきおこす原因の1つであると思うと共に、横道にそれるかもしれないが、この語のもつ魔力が、現代一般意味論でも取り扱われている如く、多くの実際場面で作用していることはみのがせない事実である。その点日本放送協会編「言葉の魔術」は、非常に興味深いものである。

## three Ranks 論

横 山 悌 志

語の分類；

或る語を実詞、形容詞その他どの語類に入れるべきかという問題は、個々の単語の問題であるが、この問に対する何らかの解答を我々は辞書に見出すことが出来る。しかしどんな語も語群も語の一部として扱われるときは、実詞として見なすことに注意しなければならない。

例えば；

- Your late was misheard as light .
- His speech abounded in I think so's .
- There should be two I's in his name .

従属関係；

Terribly cold weather (ひどく寒い天気) という結合に於いて、最後の語 weather は明らかに主要な概念であるから、Primary [一次語] と呼ぶことができ weather を規定する。cold は Secondary [二次語] , cold を規定する terribly は Tertiary [三次語] と呼ぶことができる。ここで三次語は別の語 (もつと複雑な語群において) に限定されないのだろうか、という疑問を抱く、この疑問に対して、Jespersen は The Philosophy of Grammar の中で [三次語は更に別の語 (四次語: quaternary) によ

つて規定されるというふうに進むが、三つ以上の順位を区別する必要はない。何故なら、三次語とそれ以下の順位の語とを区別する形式上、その他の特色がないからである。と述べ、

a certainly not very cleverly worded remark . (たしかに言いまわしのあまり上手でない言葉) という例をあげ、この句で certainly, not, very のどれも次の語を規定しているが、文法的には；

- certainly a clever remark .  
(Ⅲ)
- not a clever remark .  
(Ⅲ)
- a very clever remark .  
(Ⅲ)

に於けるそれぞれの語が三次語であるのと何の相違もないと、説明している。

Rank 中の Junction と Nexus ；

- (1) a furiously barking dog .  
(Ⅲ) (Ⅱ) (Ⅰ)
- (2) a dog barks furiously .  
(Ⅰ) (Ⅱ) (Ⅲ)

この二つの表現を比較してみると、動詞 bark は二つの別な形 barking と barks で現れている。しかもこの二つは、dog に従属しており、かつ furiously より rank が上である。これら二つの表現の間に深い関係があることはわかるが、dog と barking の関係が基本的には、dog と barks のそれに等しい (primary - secondary) ということが両者の構造の差を説明することには、ならないと思うのである。barking が dog に従属 (を修飾) していることは容易にわかるが、barks が dog に従属していると考え、出来ないだろう。

Jespensen はこの2種の結合の相違を次のように説明する：

「barks と barking とは明らかに密接な関係があり、同じ語の異つた形式と呼べるであるが1つのまとまつた伝達として完結しているのは、(2)の方であり、(1)はそういう特有な完結性を欠いていて、我々に「その犬がどうした」と反問させるのである。文構成力は、しばしば「定動詞形」と呼ばれる語形のすべてに見出されるが、barking, eaten [分詞] のような語形や、to bark, to eat のような〔不定詞〕には見出されない。構文論上、分詞も不定詞も動詞の特色を多く保持してはいるものの分詞は、実は動詞から形成された一種の形容詞であり、不定詞は実詞と共通点をもっている。即ち「名詞相当語」である。それ故ある1つの観点から見れば「動

詞] という名称は、文を構成するいちぢるしく動詞的な力を有する語形(定動詞形)に限定し、そして「準動詞形」(verbid: 分詞と不定詞)を名詞と動詞との中間の別個の類として取り扱うのが正しいであろう。このように、又我々も英文法の構義ですでに学んでいるが、この両者を別個の名称で呼ばざるを得ないという結論に達した。即ち(1)は junction で(2)は nexus である。語類と Rank ;

我々はすでに Primary, Secondary, Tertiary は Nexus にも Junction にも使えるけれども Junction に於ける secondary を Adjunct と呼び、nexus に於ける secondary は Adnex, tertiary をあらわすには、Subjunct (Subnex) という名称を用いることを学んだ。

今まで我々が学んだ如く、Primary として実詞, adjunct として形容詞、subjunct として副詞が現れていた。これら3つの品詞と3つの rank の間にたしかにある程度の対応が認められる。実詞とは通例 primary の位置を占める語で、形容詞とは通例 adjunct の位置を占める語、副詞とは通例 subjunct の位置を占める語と無理に定義しようとすればできないこともないが、実詞が形容詞になつたり、形容詞が実詞になつたりするので、この定義はあくまで完全なものではない。このことから両者即ち語類と rank とは常に2つの異つた領域で働いているということがいえる。

上記の問題をより明らかにする例をあげてみよう。

等位の primary が2つまたはそれ以上あることがあるが; The dog and the cat ran away. これと同様に同一の一次語に2つまたはそれ以上の等位の adjunct がある。例えば、a nice young lady の場合 a, nice, young の各語が lady を規定している。これは次の2つの表現を比較することによつてより明確になる。

- much good white wine (多量の良い白ぶどう酒)  
(II) (II) (II) (I)
- very good wine (非常に良いぶどう酒)  
(III) (II) (I)

等位の adjunct はしばしば連結詞によつて結ばれる。例えば;

- a rainy and stormy afternoon.

連結詞がないと最後の adjunct はしばしば Primary と特に密接に結びついて1つの概念を成し、一つの複合一次語(ex: young - lady) を作る。特にある固定した結合に於いてそうである。例えば; by great good fortune (非常に運よく) 時には、2つの adjunct の第一のものが第二のものに従属してほとんど Subjunct になる傾向がある。

- [ex] ・ burning hot soup (焼けつく程熱いスープ)  
 ・ a shocking bad nurse (ひどくいけない乳母)

adjunct の例で当然 subjunct の予想されるものとしてフランス語の

- ・ Elle est toute surprise (彼女はまったく驚いている)  
 ・ Les fenetres grandes ouvertes (大きく開いた窓)

がある。等位の subjunct はたとえば；

- ・ a logically and grammatically unjustifiable construction  
 (Ⅱ) (Ⅲ) (Ⅱ) (Ⅰ)

(論理的にも、交法的にも筋の通らない構文)

語類と rank が異つた領域にあることを説明するには、まだまだ不十分である。

属格の Rank ；

adjunct としての実詞、実詞を adjunct として用いる古くからある方法は実詞を属格にすることである。たとえば；

- ・ Keat's poems , the butcher's shop.

しかし属格もまたしばしば省略と呼ばれる事実によつて primary となりうる。例えば；

- ・ St. Paul's is a fine building.

(セント・ポール〔寺院〕は立派な建物だ)

また、2つの実詞的概念を結びつけたいと思う時に、場合によつては、それらの一方を単なる並置によつて他方の adjunct にすることが、理論上、實際上、不可能なことがある。この際、言語としばしば「限定属格」または、それに相当する前置詞結合の助けを求めるのが普通である。

- ・ the city of Rome. (ローマの町)  
 ・ urbs Romae. (ラテン語)  
 ・ La cite de Rome. (フランス語)

またこの場合「二重属格」という珍しい現象も見られる。

- ・ an old friend of Tom's. (トムの旧友)  
 ・ This is no fault of Bill's. (これは決してビルのせいではない)

語群の Rank ；

語群に2語または、それ以上から成り、各種相互の関係は、非常に異つた性格のものもあるが、多くの場合、それは単独の語と同等の順位を占めている。にもかかわらず時折一語なのか二語なのか決めるのが困難なことがある。しかしこの語群の rank に於ては、疑わしい例を一語と見るか

2語と見るかということ、全々問題ではないと思う。何故なら語群は、一次要素にも adjunct または、subjunct にもなりうるからである。ここで我々が注意しなければならないのは、語群の rank と語群内での rank とは全々別なものであるということである。

## Clause の Rank ;

非常に特殊の場合は一般に Clause と呼ばれる語群である。

### (1) Primary としての Clause : 名詞相当節

- That he will come is certain.
- What you say is quite true.
- I do not know where I was born.
- We talked of what he would do.

以上の例で、最初の2つの文では、Clause が主部になっており、あとの文では、それが動詞、または前置詞の目的語になっている。しかし一種の擬似文法的な分析が存在しているので、これに対して我々は注意する必要がある。すなわち、

- Who steals my purse steals trash.

といったような例に於いて「steals trash の主部は he でありこの he は、Who に包含され、この he と関係節との関係は、the man who steals における the man と関係節との関係と同じことである。」これは数多い不必要な虚構の一例であつて、言語事実を真に理解するのに役立つことはなく、むしろいたずらに文法をそこない煙わしくするように思える。

### (2) Secondary としての Clause ; 形容詞相当節

- I like a boy who speaks the truth.  
(= I like a truthful boy.)
- This is the land where I was born.  
(= This is my native land.)

### (3) Tertiary としての Clause ; 副詞相当節

- When he comes , I must go.
- Lend me your knife , that I may cut this.
- Whoever said this , it is true.

3番目の例文に於いて、whoever に導かれる節が主部でも目的語でもなく、it is true に対してもつと緩かな関係にあることがわかる。

Clause において我々がたびたび注意しなければならないことは、主要概念が必ずしも「主節」に表現されるものではなく「従属節」にも表現されるということである。例えば；

This was because he was ill. また、It is true that he is very learned. の「主節」において表現されている概念は、Certainly he is very learned. (たしかに、彼は学識が深い) のように単純な副詞で言いなおすことができる。

これだけではまだ不十分ですが、Three Ranks. の中に於ける問題点、疑問点を断片的に述べてみました。

## 「言語と文学」

手 島 稔 之

人間とは何か。人間はいかに生きるべきか。我々は常にそれを考え、いつも答えを求めている。文学とはそういう問に対するひとつの解答である。しかし我々は文学に接する機会を持っていても、真に満足することなく了ることが多い。問題のありかは明らかにされることもあるだろうが、かえって迷路に導き入れるものさえなくはない。解決されることもあろう。しかしさらに問題の再提起を我々に向かつて突きつけるものもある。文学作品とは、いつも問題と解答と多くの混沌とを含み持ち、その憂鬱な眼で我々を正面から凝視してくるものなのだ。救われたい我々読者は文学作品の中を、オアシスを求めて沙漠を徘徊する旅人として歩き回る。文学作品はひとつの或る生物体のように有限なオルガニズムの形態を持つている。それは我々と何らの関係もないものさえ含んでいる。実は、我々はそのオルガニズム全体を理解し尽さねばならない義務はないのである。或る一個の文学作品は、我々にとって、いわば赤の他人であり、見知らぬ人でしかない。我々は、初めて文学作品に純真無垢な一読者として接するということは、初対面の人に出会うのと同じである。唯彼の語ることを聞き、彼の音調を味わい、彼の例証するところを認識するというだけでなく、既に我々は問題意識を持った心で、しかもすなおに耳を、心を傾けて彼の饒舌を辛抱強く吟味するの